

Title	国際結婚論の再構成 : 旧ソビエト連邦出身女性と日本人男性を事例に
Author(s)	Kim, Viktoriya
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59339
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	キム ヴィクトリヤ KIM VIKTORIYA
博士の専攻分野の名称	博士 (人間科学)
学位記番号	第 25302 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	国際結婚論の再構成 —旧ソビエト連邦出身女性と日本人男性を事例に
論文審査委員	(主査) 教授 牟田 和恵 (副査) 教授 スコット・ノース 准教授 辻 大介

論文内容の要旨

本論文は、旧ソ連出身女性と日本人男性の国際結婚カップルを対象に、それらのカップルの国際結婚経験を社会的に考察したものである。この背景には、近年における国際結婚の増加が挙げられる。そのうち、旧ソ連出身女性と日本人男性との国際結婚カップルを対象とした先行研究は現在のところ存在しておらず、本研究は、まずその点を補足したものとイえる。

第1章では、本論文の問題意識、問題設定について論じ、また、国際結婚を扱った先行研究が採用している理論的なパースペクティブについて検討を加えた。それらのパースペクティブは、マクロ、メソ、マイクロに分けることができる。マクロ・パースペクティブを採用する研究は、歴史の流れの中で日本と他国との関係を考察し、国際結婚が成り立つようになってきた過程を明らかにしているといえる。マクロ・パースペクティブからの研究は、結婚する個々の男女の実態以上に、送る側の国と受け入れる側の国のジェンダー関係と国内政治経済から国際結婚を説明しようとする。続くメソ・パースペクティブからの研究は、受け入れる側と外国人との間に生じる相互の期待の相違、文化・言語的な相違を強調し、受け入れる側がどのように対応し、移住する側がいかに適応するのかを考察する。最後のマイクロ・パースペクティブからの研究は、国際結婚をしている個々人の経験を明らかにすることを強調するといえる。

これらの検討を踏まえ、本論文では 個々人の経験と構造との相互作用のプロセスを同時に扱うことができるエージェンシーという概念を採用し、旧ソ連出身女性と日本人男性のカップルの経験を考察した。具体的なデータは、筆者が2006年から2011年にかけて旧ソ連出身女性と日本人男性を対象として行なった各種調査（アンケート調査、参与観察、女性たちのインターネット・フォーラムの「参与」観察、フォーカス・グループ・インタビュー、継時的調査）から得た。

本稿の構成は次の通りである。本研究は三つの部分に分けられる。

第1部では、旧ソ連諸国の国内の状況と事情が女性の人生における選択肢に与える影響、

及びグローバル化における国際移動と国際結婚に関するイメージ形成と女性と男性の選択肢との関係について考察している。

第2章では、ソ連邦における女性のジェンダー規範の形成について考察している。ソ連時代における男女平等という理念、そして「働く女性」という女性の理念から、ポスト・ソビエト時代における「専業主婦」という女性像へ、ジェンダー規範が移行した。すなわち、1970・80年代生まれの旧ソ連諸国女性にとって、「専業主婦」という理念が女性の人生における理想とされる事態が到来した。他方で、国内においては、男性の不足をはじめ、このような理念を実現させる社会的条件は整っておらず、女性たちが自分の理想を実現するために、一国に制限されず、グローバルな条件の中で、自分に与えられた資源を活用しつつ、新しい生活スタイルを目指すようになったことを指摘した。

第3章では、国際結婚をするために女性が利用する方法と資源を考察している。女性は日本に出稼ぎをしつつ、自分の所有する資源を意識しはじめ、結婚相手を探すようになる。女性は、日本人男性を、自分たちが抱いているような結婚のイメージを託すことのできるような相手であるかどうか検討するようになる。他方で、男性は「伝統的な」ジェンダー役割を期待しつつも、外国人・白人・ヨーロッパ系として、「近代的な」イメージを与える女性と家族を作ろうとする。すなわち、 prestige とステータスになるような女性を求める。このように、女性のみならず、男性も「上昇」婚を求め、彼／彼女らの結婚が、相互が所有している資本の転換として捉えられることを指摘した。

第2部では、国際結婚における女性の日本生活への適応に焦点を当てている。

第4章で、日本における旧ソ連出身女性の適応に影響を及ぼす三つの要因を指摘している。それらは、まず、マクロの構造的な制限、特に「国境」と「国籍」をめぐる問題であり、送り手側（旧ソ連諸国）と受け入れ側（日本）、またグローバルな範囲における変化が個人への生活に影響を与える。続くメソの要因は、女性を取り巻く夫のような家族も含めた周囲の社会関係や社会環境である。つまり、家庭内の状況や事情が女性の適応過程に影響を及ぼす。最後のマイクロな要因は、女性自身の適応戦略である。女性は適応過程において、意識的・無意識的に様々な選択をする。それによって、彼女が今後日本社会でどのように生活していくのが影響を被る。また、継時的な調査からは、これらの要因が固定されているわけではないことがうかがえた。様々なマクロとメソの状況により、マイクロの適応戦略が変わることがあり、また、マイクロのレベルでの変化が、メソでの変化を生じさせる。

第5章では、カップルの間に生じる問題をカップルがどのように解決するのかを明らかにしている。そこからは、男女が意識的・無意識的に相互の関係において「文化」という概念を利用し、生活を交渉していることが明らかになった。女性は自分の育った背景と日本で得られた知識双方ともをツールキットとして利用する。また、旧ソ連出身者のネットワークを通して、情報交換をしながら、自分が利用するツールキットを変えていく。このように、女性たちは「文化」を「変容させる」行為者とみなすことができる。

第3部では、カップルの戦略と交渉プロセスを明らかにしている。男女の関係において、様々な行為パターンと戦略が利用され、相手の反応により相互の戦略と行為パターンが変化していく。

第6章では、「協同・協力」、「妥協・取引」、「抵抗」、「（シンボリックな）退出」という戦略を取り上げている。各戦略を実現するために男女は異なった行為とツールキッ

トを利用する。通常、男女には相互の関係において利用しやすい戦略・行為があり、彼／彼女らのツールキットは使いやすいものから成り立っているものの、夫婦の生活に問題が発生した場合、男女は自分のツールキットを再検討し、行為と戦略を変えていく。

第7章では、女性の戦略について、継時的に考察し、シーケンスを見出している。第6章で考察した4つの戦略が女性の結婚生活においてどのように利用されていくのかを時間軸に沿って検討した。彼女たちは日本人男性との結婚生活で様々な問題に遭遇するものの、可能な選択と様々な戦略の計画を行い、自分の持っている資源を意識し、「マネューバリング」にエージェンシーを行使する。

最後に、第8章において、本論文の要約と、本研究の貢献を明確にしている。それは、第一に、対象面において、これまで先行研究では扱われてこなかった旧ソ連諸国女性と日本人男性のカップルを取り上げ、その実態を明らかにしたことにある。また第二に、国際結婚をしている女性、カップルに対して詳細なインタビューや参与観察を行い、それをエージェンシーという概念を用いて分析することで、詳細なマイクロなデータと国家間関係のようなマクロな現実を共通の地平で扱ったことである。このような理論と方法が、今後の国際結婚の研究において用いられるべきであることを示唆した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、旧ソ連出身女性と日本人男性の国際結婚カップルを対象に、それらのカップルの国際結婚経験を社会的に考察したものである。近年における結婚数の増加にもかかわらず、旧ソ連出身女性と日本人男性との国際結婚カップルを対象とした先行研究は、これまで存在していないが、そのなかで本論文は、申請者が6年間にわたって旧ソ連出身女性と日本人男性カップルを対象として行なった綿密な各種調査に基づく初めての実証的研究となっており、本研究は、まずその点について学術的意義がある。

本論文は大きく三つの部分に分かれるが、まず第I部では、旧ソ連諸国の国内の状況と事情が女性の人生における選択肢に与える影響、及びグローバル化における国際移動と国際結婚に関するイメージ形成と女性と男性の選択肢との関係について考察している。具体的には、近年の日本人男性と外国人女性の国際結婚研究で論じられてきたこととは異なって、女性は、日本人男性を、自分たちが抱いているような結婚のイメージを託すことのできるような相手であるかどうか検討した上で結婚相手とし、他方、男性は「伝統的な」ジェンダー役割を期待しつつも、外国人・白人・ヨーロッパ系として、 prestige とステータスになるよう旧ソ連出身女性を求める。すなわち、女性のみならず、男性も「上昇」婚を求め、彼／彼女らの結婚が、相互が所有している資本の転換として捉えられることを指摘した。

第II部では、国際結婚における女性の日本生活への適応に焦点を当て、マクロの構造的な制限、特に「国境」と「国籍」をめぐる問題、続いてメゾレベルの要因、すなわち女性を取り巻く夫や家族も含めた周囲の社会関係や社会環境、そしてマイクロレベルの要因、つまり女性自身の適応戦略に着目し、さらにそれら三層が相互に影響を及ぼす様相を複合的に検討している。第III部では、エージェンシーの概念を活用し、男女の関係において、様々な行為パターンと戦略が利用され、相手の反応により相互の戦略と行為パターンが変化していく、カップルの戦略と交渉プロセスを明らかにしている。

以上のように、本論文は、研究の対象という点で意義があるだけでなく、国際結婚をしている女性、カップルに対して詳細なインタビューや参与観察を行い、それをエージェンシーという概念を用いて分析することで、詳細なマイクロなデータと国家間関係のようなマクロな現実を共通の地平で扱った、優れた研究となっている。

このように、本論文は、国際結婚研究一般のうえでも、方法的かつ理論的に優れたものとなっており、同研究分野において新たな学術的な貢献をなしたといえる。

以上のことから、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。